



No. 56 [平成30年 9月12日]  
岡山県総合教育センター  
〒716-1241  
加賀郡吉備中央町吉川7545-11  
TEL(代) (0866)56-9101  
(特別支援教育部) (0866)56-9106  
(特別支援教育部相談専用電話)  
TEL (0866)56-9117  
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

## お疲れ様でした! ~夏の研修講座~

いよいよ2学期が始まりました。静かだった学校も子どもたちの元気な声が響き渡っているのではないかと思います。夏季休業中は、猛暑にもかかわらず、多くの先生方がセンターに来られ、自らのスキルアップに取り組まれました。ドイツのある教育学者は「進みつつある教師のみ、人を教える権利あり」と述べています。先生方の学ぶ姿勢、身に付けた知識・技能は、きっと、子どもたちのより良い学びにつながると思います。断片的ではありますが、私も様々な講師の先生の話の伺う機会がありました。そこで、今回の「特別支援教育つうしん」では、夏の研修講座の中で印象に残った内容(ちょっとマニアックですが…)をいくつかお伝えしたいと思います。

### 今ある力で、今を生きる

国立特別支援教育総合研究所の滑川典宏先生が、講義の中で紹介してくださったキーワードです。以下、プレゼン資料に示されていた文献の一部です。



教育においては基礎から応用へという流れが多い。また教育だけでなく日々の子育てにおいても、子どものできないこと、未熟な点が課題とされ、何かができるようになること、力を身につけること、上手になることに価値がおかれることが多い。確かに今より能力が高まる、何かができるようになることは歓迎すべきことであろう。

しかし、人はいつの瞬間も、今ある力で、今の手持ちの力でその一瞬を過ごさなければならない。明日身につく力で、今を生きることはできない。今は今ある力で生きるしかない。力を身につけること、蓄えること、基礎を固めてから応用に入ること。これらは確かに重要ではあるが、暮らしの一瞬は、常に応用の連続である。時間を止めておいて、その間に基礎を固めてから対処するなんてことはできない。なので、今ある力を使うこと、今ある力を出せること、今ある力で対処することも重要なことと思う。せっかく力を身につけていても出せずじまいということもある。力を蓄えること、身につけることを目指すだけでなく、力をいかに出すか、力を出せる、ということにも教育はもっと取り組んでいく必要があると思う。(中略) 未来の準備のためだけに今があるのではなく、今も生きる本番だからである。(国立特別支援教育総合研究所 牧野泰美『スタタリング・ナウ 2011.4.18 No.200』(日本吃音臨床研究会))

ところで、私は、趣味でソフトテニスをして(決してうまくはないのですが…)います。テニスが上達するためには、様々な動きをパーツに分けて反復していく基礎練習はとても大切です。しかし、それだけで試合に勝てるかというところがそういうわけでもないのです。試合という実際の場面でないと習得できない動きや戦術といったものがあります。また、試合の中で発揮できたことによって、本物の力として身に付く基礎スキルもあります。そして、何よりテニス本来の楽しさを味わうことができます。

“基礎から応用”、“将来のための今”、という考え方は、教育において一般的であり、また、大切な考え方だと思います。その考え方をベースにしながらも、学習内容や場面に応じて、今ある力で今を生きる、という考え方で、学習へのアプローチを考えてみることも大切なのではないのでしょうか。昔、同僚だったある

先生が「○○くんは、算数が苦手なんじゃけど、不思議なことにお金に置き換えて考えさせるとできるんよ」と笑いながら話されていたのを思い出します。「実際の場合」「本物にふれる」「必要感」「必然性」「意欲」といったキーワードが知識やスキルの習得に大きく関わっているような気がします。そして、これらは、私たちがこれから取り組んでいく授業改善においても大切な視点になるのではないかと思います。

## 自閉症の生きづらさ…

この夏、自閉症の障害特性に言及された講師の先生方が何人もおられました。自閉症の障害特性については、研修講座に限らず、書籍やネット等でもかなり多くの情報提供がなされ、教科書的な知識については、多くの先生方の知るところになっているのではないかと思います。

例えば…

- ・相手の視点に立って考えることの困難さ
- ・言外の意味をくみ取ることの困難さ など。

ですが、その“教科書的な”障害特性に関する知識が、実際の学習や生活場面において、どのように現れ出るのかというイメージについては、まだまだ共有されていない印象があります。

名古屋市教育委員会の池田和穂先生は、教師が「みんな、机の上を片付けて」と指示したときに、一人だけ片付けようとしなかったという子どもの例を挙げられながら、相手視点に立つことが困難であるために生じる“ずれ”について説明されました。



みんな、机の上を片付けて！

ぼくから見て「みんな」は、ぼく以外の全員のこと。ぼく自身は「みんな」の中に入っていないよ！

だから、ぼくは片付けなくていい。



先生にとっての「みんな」という言葉が示す範囲、「ぼく」にとっての「みんな」という言葉が示す範囲。視点が変われば、範囲も変わります。私たちは、そのことを暗黙の了解としながら、瞬時に視点を変換させながら無意識のうちにやりとりを成立させています。しかし、相手の視点に立つことに困難さがある自閉症の子どもたちは、このような場面で容易につまずいてしまうと考えられます。

また、岡山大学の仲矢明孝先生は、我々のコミュニケーションが言外の意味をくみ取ることで成り立っていることを、次のような例を挙げながら説明してくださいました。例えば、授業中に、先生が「みなさん、赤鉛筆ありますか？」と尋ねたとします。そのとき、ほぼ全員がその問いに対して直接答えることはせず、筆箱から赤鉛筆を取り出し、書く準備をするというのです。

ところで、みなさん、赤鉛筆ありますか？



先生は、言葉の上では、赤鉛筆の有無を尋ねているように聞こえますが、真意は赤鉛筆を出して書く準備をしてほしいということです。このような言外の意味を読み取ることで成立する意思伝達は決して珍しいことではなく、もしかすると、私たちのコミュニケーションのほとんどは、言外の意味を読み取ることが前提となっていると考えられます。しかし、そこに弱さがあるのが自閉症の特性の一つです。ということは、彼らにとってコミュニケーションを成立させることは至難の業だと言えます。

自閉症に限らず、私たちは、障害特性として語られる状態像を、日常場面の具体的な姿として変換できる想像力が必要だと思います。それによって、子どもたちの具体的な場面での困難さを予測し、適切な支援を行うことができるからです。生きづらさを抱えながらも頑張っている子どもたちの安心感や自己肯定感を支えていきたいものですね。